

自由ヴァルドルフ学校の学校建築(2)

—「有機的建築」としてのゲーテアヌム—

土 屋 文 明

1 本稿の課題

先の論文「自由ヴァルドルフ学校の学校建築(1)」では、ヴァルドルフ学校建築の理解のために前提となる、R.シュタイナーのゲーテの自然科学研究、とりわけゲーテの「メタモルフォーゼ」研究を取り上げた。それは、ゲーテの「メタモルフォーゼ」論は、シュタイナー建築の基礎にあるものだからである。

ゲーテは、自然を分断することにより、その生命を奪う自然科学研究のあり方に疑念を呈した。言い換えると、無機物に対する研究方法を、有機物に適用することに対してゲーテは批判した。そして生きた自然、絶えず変化し成長する自然そのものを明らかにする研究のあり方を模索した。その成果として得られたのが、「メタモルフォーゼ」であったといえる。シュタイナーは、このゲーテの発見をとりわけ重視した。シュタイナーの建築論は、このような自然研究の理念や方法論を受け継ぎ、発展させたものにとらえることができる。

本稿では、シュタイナーの第1ゲーテアヌム（以下ゲーテアヌムと記す）についての論述を検討することによって、彼のいう「有機的建築」の意味するところを明らかにしたい。第2次大戦後のヴァルドルフ学校の建築は、地域や環境、さらには学校規模の条件などによりそれぞれ独自の建築を目指してはいるものの、いずれの学校も、ゲーテアヌムによって示された「有機的建築」を共通の範としているからである。

そして最後に、ヴァルドルフ学校の建築に携わる者が、シュタイナーの「有

機的建築」をどのように受け継いでいるのかに少し触れることにしたい。それによって今後の論考の方向性を示すことができるだろう。

2 「主知主義」に対抗するものとしての建築（芸術活動）

シュタイナーがゲーテアヌムの構想をし、その建築に携わった当時、彼はどのような問題意識を持ち、それに対してどのように対処しようとしたのだろうか。彼は、当時の自然科学が外的に現われる現象を、科学技術の道具を用いて感覚的観察によって探究するやり方が一般的であることを指摘し、次のように続ける。

認識が問題になるとき、現代世界が特に信頼をおいているのは、主知主義です。……知的に正しいことを証明できるときにのみ有効でありうると表明している認識論や、その他の学問的議論がおそらくあるでしょう。論理—抽象的並びに知的形式に収めることのできないものは、認識とはみなされません。自然科学において認識上の限界であると当然のことのように主張されていることに対して実際に立ち向かおうとし、この認識領域を探りあてようとする精神科学は、知的な方法が唯一の伝達法ではありえないことを、次第に明確にしなければなりませんでした。(Baugedanke, 14)
(括弧内前は引用文献、後ろの数字は頁数、以下同様)

シュタイナーは、主知主義が至るところで万能視されていることに対する疑念を表明している。ゲーテは、彼独自の自然観に基づいて、ニュートンに代表されるような自然科学研究の手法に異を唱えたことは既にみたとおりである。シュタイナーが当時一般的な認識論に投げかけている視点は、ゲーテのそれであった。ゲーテは、彼の目には生きた自然を分断し、死せる事象を扱っているに過ぎない当時の自然科学に疑念を抱き、一貫して生きた自然そのものにせまろうと努力した。それは、言い換えれば有機的自然であった。「有機的」は、ゲーテの「メタモルフォーゼ」の概念に代表されるものである

が、「有機的自然」の要点は、自然は、生命を持った、動的に変化する存在であるということにある。このような自然を、科学的実験器具を使って抽象的数字に置き換える自然研究のあり方は、ゲーテのとるべき道ではありえなかった。シュタイナーは、「論理—抽象的、知的形式」による認識、引用文にいう「主知主義」について、この認識形式に大きな限界性を認識している。とりわけ人間、すなわち生命を持ち、成長発展するものに関する学問においては、「主知主義」との離別から出発しなければならない。彼はいう。

この世界が概念や観念だけでは表現できないようにできているとするなら、例えば人間発達の法則を知ろうとする時などに、像によって表現しなければならないようにできているとするなら、理論的表現をとる言葉とは何か別の表現形式に足を踏み入れなければならないでしょう。知的形式とは別の表現形式に進まなければなりません。

こうして私は、とりわけ人間発達の中で生命みなぎるものを言葉を使って理論的にのみ表現するのではなく、舞台の場面を通して表現する必要性を感じました。(Baugedanke, 14)

引用文には、シュタイナーのゲーテ研究から得られたと思われる視点が含まれている。シュタイナーにとってゲーテ研究は、いわば文学者としてのゲーテ、同時に自然科学者としてのゲーテの追体験の場でもあった。ゲーテの芸術論、すなわち芸術と学問は、ひとつの同じ根源から生じるものであり、両者は同じように客観的であり、ただ形式が異なっているに過ぎないという芸術論を、シュタイナーは、自らの理論とした(「教育芸術論」, 151)。彼にとって芸術と学問との違いは、同じ事柄の追究結果の、表現形式の違いでしかない。そしてその理論を具体的な活動として実践しようと模索した。シュタイナーにとって「主知主義」の代案が、自らの芸術活動の試みであったといえる。ゲーテアヌムは、シュタイナーがその精神科学を、引用文にあるように「知的形式とは別の表現形式」で、すなわち芸術的形式で明らかにしようとい

う意図のもとに建設されたものであった。

ゲーテアヌムは、もともと彼が創作した「神秘劇」上演のために建てられた。「神秘劇」について触れることにより、ゲーテアヌムの持つ、というより持つことが期待された特性について言及できるだろう。

シュタイナーは、彼の提唱する人智学について、著書を著わしたり、数多くの講演をしているが、それとは別の芸術的形式で説明しようとして創作されたのが、「神秘劇」である。すなわち「神秘劇」は、理論的、思想的なものを、文章や講演形式によらないで、芸術的に表現することを意図して創作されたものである。そして上にも書いたように、その「神秘劇」を上演するために建設されたのが、ゲーテアヌムである。「神秘劇」は、ゲーテアヌムができる以前に幾度も上演されたが、シュタイナーの精神科学への無理解などがあって、彼の期待したような上演結果は得られなかったようである。しかし、上演が成功しなかった理由は、もう少し根本的なところにあったと、シュタイナーは考えたようである。彼はゲーテアヌムの必要性について、次のように述べている。

人智学的精神科学がまさに人間性全体に基づいて創り出されることから、その建築のために、任意の建築様式を採用することはできませんでした。なぜならその場合、建物のフォルムとその中に向かって語りかけられるものとの間に、矛盾が生まれただろうからです。この精神科学は、まさに単なる理論以上のものであり、生命であります。そうであるからにはそれは、核心を提供するだけでなく、極めて多様なフォルムを持つ殻をも提供しなければなりませんでした。語られ、神秘劇が上演され、今オイリュトミーが上演される際に従われるのと同じ最も内的な法則に基づいて、建築も創造されなければなりませんでした。(Baugedanke, 20-21)

引用文には、ゲーテアヌムの重要な特性の一つが語られている。すなわちそれは、中身（理論、理論的活動）と外枠（建築）とが密接な関連性を持つ

ものでなければならぬ、と考えられていることである。ゲーテアヌムの場合は、シュタイナーの精神科学の表現手段である「神秘劇」「オイリュトミー」などと建築とが、互いに共振することが求められた。シュタイナーは、これについて胡桃を例に説明している。胡桃の実と殻は同じ法則性に従って形成される必要がある。その時初めて、植物としての胡桃が成立する。胡桃の殻の中に別の植物の中身が入るとするならば、植物としての胡桃、言い換えれば有機体としての胡桃ではなくなる。胡桃を精神科学と置き換えるならば、この精神科学を演ずる場は、どこでもよかったわけではなく、この精神科学が従う法則と同じ法則に基づいた建築が不可欠であった、シュタイナーはこのようにいう。そうであるならば、従来の建築様式は、いずれもシュタイナーの満足できるものではなかった。

人智学的精神科学がまさに学問であり、芸術であり、同時に宗教であることによって、この精神科学は、一般に行われているあらゆる建築様式から離れて、その独自の建築様式を打ち立てなければなりませんでした。
(Baugedanke, 21)

シュタイナーのいう精神科学が他の思想と相容れないものであり、この精神科学が展開されるための特別な空間が必要であると考えられたとき、ゲーテアヌム建築は、当時の人智学運動の高まりを背景に、必要欠くべからざるものとして求められた。主知主義に対抗するものとしてのシュタイナーの芸術活動は、ゲーテアヌム建築によって初めてその根拠地を見いだしたというわけであった。

3 全体と部分との有機的関連性 — フォルムとしての有機性 —

新しい建築様式としてゲーテアヌムに要請されたことは、上でみたように内と外との密接な関連性、すなわち建築の中で行われることと建築との有機的関連性であった。これと同時にゲーテアヌムの特性として追求されたこと

は、人間や植物などの有機体と同じように、建築の一切の構成部分は、全て必然性を持ってあるべきところに位置するということであった。ゲーテアヌム建築に際しては、シュタイナーによる建築全体の構想から、すなわち全体性を顧慮して、個々の全てが位置づけられた。周知のようにゲーテアヌムの場合は、まずシュタイナー製作による 20 分の 1 の模型が製作され、設計を含めた建設上の技術的問題は、それを大前提にして解決するように進められた。

……この建築に関して重要なことは、あらゆるものがその位置に関して必然性が感じられること、有機体のある部分がそれが存在する位置に関して必然性が感じられるのと同じように、あらゆるものが知覚されることです。
(Architektur, 25-26)

引用文にあるように、建築が有機体であるとするならば、人体の各器官があるべきところに収まって、全体からみてどれほど価値の低い小さな器官であるとしても、どれ一つとして任意に位置づくことはないと同じように、建築においてもまた「あらゆるものがその位置に関して必然性が感じられる」ように、造形されなければならない。シュタイナーは例えば次のような例で説明する。

……皆さんは、パイプオルガンのモチーフから、パイプオルガンが建築の中に完全に一体化するように、この建物が造形されていることを見ることが出来ます。その結果中に何か置かれたものを感じるのではなく、まさにパイプオルガンが建築から生まれたかのように感じます。これは基本原理として建物全体に貫かれています。(Architektur, 26)

引用文にある「パイプオルガンが建物の中に完全に一体化するように」、「パイプオルガンが建築から生まれたかのように感じ」るために、ゲーテアヌムでは具体的にどのような工夫がなされているのだろうか。これを確認するた

めには、少し回り道をしなければならない。

シュタイナー建築でいう「有機体」は、ゲーテの「メタモルフォーゼ」から発展したものであると考えられる。周知のように、ゲーテが「メタモルフォーゼ」を初めに使ったのは、植物に関してであった。私は、「学校建築(1)」で、次のようなシュタイナーのゲーテ「自然科学論集」の解説を引用した。

例えば植物変態論の重要性は、葉、萼、花冠などが同一器官であるという個別的事実の発見にあるのではない。そうではなく、相互に作用しあう形成の諸法則という生命ある全体に関する、壮大な思想的構築にある。(「学校建築(1)」, 238)

植物が有機体であるのは、葉、萼、花冠などが相互に無関係にくっついているのではなく、「相互の作用しあう」「生命ある全体」として存在するからである。そしてそれは、ゲーテの言葉をかりれば、各部分が、植物の原型である葉から、メタモルフォーゼしながら発展していくがゆえに、一つの生命ある全体であることができる。したがって、「メタモルフォーゼ」が、植物を有機体たらしめているといえるが、それは、有機体としての建築においても貫く原理でなければならないことになる。シュタイナー建築が、このゲーテの「メタモルフォーゼ」を建築のインパルスとしているとするならば、ゲーテアヌムは、これを具体的にどのように実現しようとしているのだろうか。

それは、シュタイナーにいわせれば「基本原理として建物全体に貫かれてい」るものである。ここでは、「メタモルフォーゼ」をフォルムとして確認しやすい例をみることにしよう。ゲーテアヌムの外からの写真をみたとき、第一に注目されるのは、その大小二つの半円形のドームの屋根であろう。小さいドームは舞台、大きなドームは観客席になっている。この大小二つのドームには、シュタイナーが心血を注いだ「メタモルフォーゼ」のフォルムが具体化されていた。

シュタイナーは、ゲーテの植物論の重要性を強調した上で、それと対照さ

せながら、大ドームの建築構成上の「メタモルフォーゼ」について説明している。とりわけ大ドーム内の左右対称に立っている、総数14本の柱、その柱一つひとつについている柱頭、台座、及び柱を繋いでいるアーキトレーブについて、それらがいかに「メタモルフォーゼ」を具現化しているかを説明する、例えば次のように。

まず最初にここにある第1の柱のための最も単純な柱頭あるいは最も単純な台座を形造ります。そして次に、抽象的思考ではなく、内面的な感覚を用いることによって、いわば自然の創造的エネルギーに身をゆだねます。次に、植物の上の葉がより複雑であると同じように、しかしメタモルフォーゼを表現するように、最初の柱の単純なモチーフに基づいて、第2の柱のより複雑なモチーフを創り出します。ですから事実ここにある7本のすべての柱の柱頭は、葉の形態がそれぞれ植物の生長によってメタモルフォーゼしながら形成されるのと同じように、それぞれ前の柱頭からそのモチーフが産み出されており、すべての柱頭はメタモルフォーゼしながら発展しています。それによって、これらの柱頭は、1番目から7番目へと次第に発展しています。(Baugedanke, 29-30)

シュタイナーは、更に、一つひとつの柱頭、台座、アーキトレーブのフォルムについて、これらがそれぞれどのように「メタモルフォーゼ」しながら連続的につながっているかを説明する。ここでは、シュタイナーが大ドームにおいては、主に、柱を中心とした建築構成を通して、フォルムとして「メタモルフォーゼ」を具現化しようとしたという事実を確認する。ただ、引用文にあるように、これらのフォルムはシュタイナーが「自然の創造的エネルギーに身をゆだね」ることによって創造された、ということはおさえておきたい。すなわちこれらのフォルムは、何かの模倣ではないということである。

さてパイプオルガンの空間である。これは、舞台と反対側の観客席後ろ側から始まる左右の第1柱の間に挟まれた位置にある。

パイプオルガンの備えつけに際しては、それが異質な空間に組み込まれているという感情が持たれないように、この位置でパイプオルガンの外枠とオルガンそれ自体が、フォルム的に全体から生じるように感じられるよう試みました。ですから、建築様式と彫刻もまた、パイプオルガンの管などによってできる線に合わせられています。(Baugedanke, 36)

先にみたように、観客席後ろ側から、左右対称の柱がそれぞれ7本ずつ立っており、これらは、柱頭、台座、柱頭を繋いでいるアーキトレーブのフォルムの変化によって、観客席後ろ側から、舞台の方に向かって「メタモルフォーゼ」するようにフォルムとして構成されている。パイプオルガンのモチーフは、左右第1柱を繋いでいるアーキトレーブの下にある。そして引用文にあるように、幾本ものパイプの管の縦線とパイプオルガンの外枠に施された彫刻のフォルムが、上方にあるアーキトレーブと調和するようにフォルムの構成がなされている。これによって、パイプオルガンが敷設されている空間が、周りの空間と調和するように造形されることによって、それが「メタモルフォーゼ」空間の一部でありえている、とシュタイナーは説明している。

いま一つの例をみたが、シュタイナーによればゲーテアヌムは、「メタモルフォーゼ」が「基本原理として建物全体に貫かれてい」る建築である。そしてそれによって、建築の全体と各部分との有機的な関連性が実現されているのである。

このような建築実現のためにゲーテアヌムにおいて避けては通れなかったことは、建築する際にあるいは設計図作成の際に力学的要素をどのように克服するかということであった。というのは、このような建築は、まず始めに「自然の創造的エネルギーに身をゆだね」ることにより得られる全体建築の直観があり、それに従って生まれる建築のフォルムが、何よりも優先されるからである。

一般的な建築構想においては、幾何学、機械工学、力学でいう支えと荷

重だけが感じられるに過ぎません。ここでは、生命が存在するという感覚のはじまりが建築の中にある程度含まれていることが、平面や線すべての中に表現されなければなりません。(Architektur, 24)

ゲーテアヌムの模型は、芸術的直観に基づいて製作された、とシュタイナーはいう。「メタモルフォーゼ」、すなわち「自然の創造的エネルギー」についての直観を、建築を通してフォルムとして具現化するということが、そもそものシュタイナーのゲーテアヌム建築のテーマであったはずである。この建築の理念としての「メタモルフォーゼ」の具体物としてのゲーテアヌムのフォルムは、初めから建築の設計、施行技術を念頭に入れたものではなかった。したがって、ゲーテアヌム建築において、重力という物理的自然法則をいかに処理するかは、シュタイナーや建築家に繰り返し突きつけられた問題であった。

4 体験としての建築

上で、ゲーテアヌムは、シュタイナーの芸術的直観によって、その全体像がまず最初に創造されたことをみた。しかしゲーテアヌムは、ある理念、例えば「メタモルフォーゼ」という概念の具体化ではない。言い換えると、ゲーテアヌムは、「メタモルフォーゼ」を象徴するものではない。これは少し分かりにくい。

……ゲーテアヌムでは、抽象的なイデーが具体化されることはなかった。芸術的な感覚からフォルムが引き出されるとき、芸術的な直観に基づいて、線から線が、面から面が取り出されるときには、イデーの具体化は、全く念頭におかれなかった。(zehn Jahren, 10)

ゲーテアヌムは、特定の世界観を象徴する建築ではない。あるいは、特定の世界観を、芸術的に表現する建築ではない。ゲーテアヌムのどこにも、い

かなるアレゴリーもドグマも存在しない。シュタイナーはいう。

人智学的認識に基づいて思想の形に形成されるものは、それ自体で存在する。それを中途半端な芸術の形で象徴的に表現しようとする欲求は決して持たれない。これに対して、人智学が明らかにする現実の体験によって、フォルムや色彩の中で生きたいという欲求は持たれる。そしてこの色彩、フォルムは、ここでもそれ自体生命を持つ。これらは、いかなるイデーをも表現しない。(zehn Jahren, 10-11)

引用文は、シュタイナーがゲーテアヌムについて説明している箇所であるから、ここでいわれている「フォルムや色彩」は、ゲーテアヌムのそれである。ゲーテアヌムのフォルムや色彩は、人智学の思想を芸術の形で象徴的に表現したものではない、と書かれている。しかし「フォルムや色彩の中で生きたいという欲求は持たれ」、「この色彩、フォルムは、ここでもそれ自体生命を持つ」とある。これらの表現をどのように理解すればよいのだろうか。

有機的自然は、外的状況によって、受動的に外から規定されるのではなく、外からの影響の下に、能動的に自らを規定する。(「認識論要綱」, 100) したがって、外的観察によって得られる因果関係によって、有機的自然を説明することはできないし、法則に還元することもできない。それは、能動的に自らを規定する限り、それを理解するために外部からの観察や、証明的方法を用いることは、本質的に大きな限界性を持つのである。そして、有機的なものに対する理解は、直観以外にない。シュタイナーは、直観についていう。

直観とは直接に対象の内にあることであり、真理に参入することであり、直観はその際考慮に値するようなことを全て私たちに与えてくれる。(「認識論要綱」, 108-9)

ここでいう「直観」は、既に取り上げている「対象的思惟」(「教育芸術論」,

151)の中で生まれるものである。有機的自然に関してゲーテが直観によって得たのは、原型 Typus であった。そしてシュタイナーにとって有機体としての建築の原型は、ゲーテアヌムであるといえるかもしれない。

ところで原型は、自然法則とは異なり、「自己完結し凝固した概念形態ではなく、流動的であって多種多様の形態を取ることができる。」（「認識論要綱」, 102）すなわち、自然法則のように一義的に表現できて、解釈できるものではないのである。ゲーテアヌムが、シュタイナーのこのような有機的建築であるとするならば、それは、彼の「メタモルフォーゼ」の直観をフォルムにしたものであるととらえることができるだろう。とするならば、ゲーテアヌムを因果法則的に理解することはできないし、そのような認識の仕方は的外れのものとなる。だからシュタイナーはこういう。

ときどき訪問者にゲーテアヌムを個人的に案内しなければならないとき、フォルムや絵の一切の〈説明〉は、私にとって本来的に気が進まないと表明した。というのは、芸術的なものは、思考によってうなずけるものではなく、直接的な直観や感覚の中で受け入れられるべきものだからである。（zehn Jahren, 10）

……未来のための創造的豊かさは、生成力それ自体をイメージーションによって把握することによってのみ生じることができるのです。しかしこの力は、まず最初にこの単純なフォルムに即して実際に内面で直観することでとらえられなければなりません。自然の中で創造的に活動し、作用するものを、この建築に即して内面で把握することができます。（Architektur, 33）

このように、有機的建築としてのゲーテアヌムは、「直観や感覚の中で受け入れられるべきもの」、と考えられている。ゲーテアヌムの建築は、「メタモルフォーゼ」という理念の具体化なのではなく、「自然の中で創造的に活動し、作用するもの」のシュタイナーの追体験そのものである。したがって、訪問

者に求められるのは、ゲーテアヌムのフォルムから、シュタイナーの自然体験そしてその建築成立のプロセスを追体験することである。有機的建築ゲーテアヌムは、生命そのものであるもので、その生命に身をゆだねることによって、言い換えると直観によって初めて理解されうる。そして直観と結びつくのは、概念や法則ではなく、芸術そのものである。

……近代に受け入れられた諸形式に従えば、法則（自然法則）を概念的に創り出すときにのみ、自然物や自然現象の本質を表現すると信じられている。しかし芸術的なものが自然の創造の根底にあるとするなら、どうだろうか。その場合は、理性的なものによってのみ表現されるという先入観から出発する者は、自然の豊かな本質に決して到達することはないだろう。活気に満ちたやり方でイデー的なものを突き抜けて自然の神秘に入り込んだ場合には、概念に屈しないものが存在すること、すなわちイデーにかなった霊的状态を芸術的な直観に変えさせるときにのみ到達できるものが存在する、という経験をするだろう。……このような感覚に基づいて、ゲーテアヌムは形造られている。(zehn Jahren, 13)

生命ある有機的自然は、抽象概念によってとらえようとする、その生命を失う。自然の本質をその有機性を保ったままで体験できる方法、そして体験したものを具体化できる方法、それは芸術的方法である。そして同時に、こうして具体化されたものの本質は、芸術的アプローチによってのみ第三者に理解可能である、シュタイナーはそのようにいう。

自然にある「メタモルフォーゼ」の芸術的体験が具体化されたものが、ゲーテアヌムである。ここにある色彩やフォルムは、シュタイナーの「メタモルフォーゼ」体験そのものである。それだからこそ、ゲーテアヌムの色彩、フォルムは、「それ自体で生命を持つ」のである。

有機的自然にアプローチする際の芸術の位置づけは、彼にとってかくも重要なものであった。シュタイナーにとって自然法則は、芸術の形で具現化さ

れる。自然法則としての芸術は、生命を保ったままで我々の目の前に現われる。しかも芸術は学問と同じ一つの源泉から生じるものであり、両者は、その表現方法が異なるに過ぎない。したがって、ここでいわれる芸術は、個人的な主観性から生まれるものではない。芸術品（美）は、文字どおり「自然法則」の一つの表れと考えられている。シュタイナーはいう。

ゲーテの芸術が存在の根源から生まれているということ、ゲーテの芸術それ自体幻影でも主観的なものでもなく、詩人ゲーテが、自然作用の深みの中で世界精神を聴きとったものの法則性の告知者として現われるというところに、ゲーテの世界史的意義がある。この段階での芸術は、学問とは別の意味で、世界の神秘の解釈者となる。（傍点部原文イタリック体、以下同様）（zehn Jahren, 24）

シュタイナーは、このような芸術論に立って、ゲーテアヌム建築を行ったといえるだろう。彼は、この建築は「理性的な計画によって」ではなく、「芸術的な衝動によって成立した」、という（zehn Jahren, 21）。とするならば、ゲーテアヌムを訪れる者に要求されることは、建築のフォルムに或るシンボルを読み取ったり、抽象的概念による知性的解釈をすることではない。また、この建築を観察や研究の対象として距離を置いて見ることでもない。そうではなく、ゲーテが「自然作用の深みの中で世界精神を聴きとった」と同じようにゲーテアヌムから「聴きとる」ことが要求される。すなわちゲーテアヌムは、外側から見て考えたり批評したりする建築ではなく、建物そのものを体験する建築なのである。

ところでシュタイナーのいうように、ゲーテアヌムの中で自然の「メタモルフォーゼ」が実現されているとするなら、ゲーテアヌム建築にあたって模範となるのは、まず現実にある自然そのものであろう。しかしシュタイナーは、建築構想のインパルスはあくまで「芸術的な衝動」であったという。彼はいう。

ここには自然の模倣は何もありません。このフォルムによってあれこれ想像する人は、この建築を芸術的にではなく、非芸術的に判断していることに他なりません。(Architektur, 16)

「メタモルフォーゼ」を体現する自然それ自体は、完璧なものである。その点で現実の自然は、有機的建築の模範であることは確かであり、シュタイナーの「芸術的な衝動」に影響を与えるものであろう。しかし、「自然の中にある個々のものが全て完全な形で実現されているわけではなく、「したがって、自然の中にある個々のものをそのまま模倣することが、必ずしも理想的な芸術作品になるとは限らない」(「教育芸術論」, 152)。このことは、ゲーテアヌム建築にもそのまま当てはまる。理想的な芸術品がそうであるように、ゲーテアヌムも自然の模倣からは生まれないのである。

自然の中に有機的フォルムがあるということではできません。何らかの方法で自然の有機的フォルムを模造したり、いわばそれをシンボリックに表現するような建築のフォルムを創り出すではありません。……有機体としての建築のフォルムは、自然から完全に独立して発見され、独自のフォルムに造形されなければなりません。(Architektur, 15)

ゲーテアヌムは、自然や自然現象にあるいかなるフォルムをも模倣しているものでない、それは、有機体として独自のフォルムを持っている、とシュタイナーはいう。したがって、例えばこの建物のある部分が何か自然の中にあるものと似ていたり、建物全体が自然の何かの象徴に見えることがあっても、そのような見方は、ゲーテアヌム理解とは全く相容れないものだということである。

また、有機体としてのゲーテアヌムは、その模範として人間が考えられる。シュタイナーは、人間を建築の模範と考えるよりも、建築は人間そのものであると考えていた。彼はいう。

正面入り口から中に入る者に対して、建物全体が芸術的な方法で、〈真の人間性を認識せよ〉、と語りかけてくるはずであった。(zehn Jahren, 14)

シュタイナーは、ゲーテアヌムの平面図を取り上げた際に、この平面図の形態と人間の有機的形態との比較対照をしながら説明したが、多くの聴衆者は、この建築が人間形態の象徴的な模倣であると勘違いした、と指摘した上で次のようにいう。

……ゲーテアヌムと人間との有機的フォルムが提示されるならば、両者の関係性を見いだすことができるでしょう。しかし、一方が他方に真似て作られているということは全くありません。ここでは実際に有機的建築のフォルムが、自然と宇宙の作用それ自体の有機的創造性に基づいて造形されているのです。(Architektur, 21)

シュタイナーがゲーテアヌムの平面図と人間とを対照させて説明したかったことは、人間とこの建築との形態上の類似ではないし、この建築がフォルム的にいかに人間と同じかということでももちろんない。彼が示したかったことは、まず模範としての人間の全体構造、すなわち思考、感情そして意志を持つ一方で、頭と胴体と四肢そして中心に心のある人間の全体構造の真の理解が必要であること、そうすることで初めて人間以外の有機的フォルムを創造することができる、ということであった。そして人間総体に対する理解をもとに、「自然と宇宙の作用それ自体の有機的創造性に基づいて」造形されたのが、まさにゲーテアヌムであった。言い換えると、この建物全体の基礎にある、ある種の必然性、すなわち人間にみられるのと同じような生きた有機体的原理で建てられているということを、彼は示したかったのである。

5 有機的建築としてのゲーテアヌムのもつ意義

前節のシュタイナーの言葉をもう1度引用する。

正面入り口から中に入る者に対して、建物全体が芸術的な方法で、〈真の人間性を認識せよ〉、と語りかけてくるはずであった。

このシュタイナーの言葉は、ゲーテの自然科学研究から得られた成果の一つである、彼の建築論の特異性を表現していると共に、ゲーテアヌムの到達地点をも表現している。つまり、外からこの建物に入る者が、思考によるのではなく、この建物の持つ芸術的要素やフォルムによって、「人間とは何ぞや」ということを体感できることが、この建築に目指されたことであった。このような発想は、極めてユニークであるが、この発想自体は、ゲーテの自然科学研究から得られたものであった。

ゲーテが、何ゆえにあれほど有機的自然にこだわったのか。それは、現実の自然の生きたそのままをとらえたかったためといえるが、更に掘り下げると、彼の「自然科学の動機は結局のところ神の啓示を読み取る作業にほかならな」かったのである。（「学校建築(1)」, 245）ここに、ニュートン物理学とは別の自然科学の道を探らなければならなかった本質的な理由があったことについては既にも書いた。ゲーテの信仰の問題は別にして、ゲーテの自然科学の根本的動機をここで再度取り上げなければならないのは、この動機からくるものであるが、彼の自然科学が、人間自身をも常に含んでいることをもう1度確認したいからである。

……ゲーテの科学は、主も客も自然の一部として位置づけられている。有機体であるところの、生命ある自然をありのままにとらえるためには、「客」をそのままに受容できなければならない。すなわち、主客の境界がなくなればなくなるほど、直観によって自然がよく見えてくる。（「学校建築(1)」, 248）

引用文を視点を変えて解釈すれば、「主客の境界がなくな」る自然科学は、研究対象として自然を対象化しないということで、自分も含まれた自然を追

究しようとするものである。言い換えると、自然研究をする研究者の、人間としての自分自身のあり方が同時に問われるのが、「ゲーテの自然科学」なのである。このことには、十分に注目されるべきである。科学技術が進歩すると、とかく人間と自然との間にはっきりとした境界線が引かれ、自然は人間の征服の対象になる。それによって、科学はますます発展するが、科学と人間との乖離もそれだけ進む。例えば、人間を幸福にするはずの技術革新は、確かに一方において人間生活に利便性を提供しているが、同時に様々な環境問題をも引き起こしている。そしてその幾つかは、原子エネルギーの核処理の問題やオゾン層の問題のように、人間の将来に対して決定的なダメージを与えかねない。これらは、科学が自然から、すなわち自然に含まれる人間から遊離することから生まれる問題であろう。

第1節で、主知主義に対抗するものとしてのシュタイナーの建築についての主張をみたが、主知主義と同列にあるのが、機能主義であり、機械論的合理主義などであろう。彼の建築論、及びそれによって建築されたゲーテアヌムは、これらのものからの人間解放の試みと考えることもできる。第3節でゲーテアヌム建築に際しての荷重と支持との格闘、自然法則である重力との格闘について触れた。これはまさに、機能主義、機械論的合理主義などからの人間解放の試みを意味している。「ゲーテの自然科学」を出発としているシュタイナーの有機的建築は、絶えず人間に対して自分自身を見つめなおすよう促すのである。

そのための建築を考えると、シュタイナーの念頭にあったのはゲーテの「メタモルフォーゼ」であった。したがってシュタイナーは、建物全体を構想し、実際の建築過程において、自然の創造性に対する直観から自らが「メタモルフォーゼ」を追体験しなければならなかった。こうして完成されたゲーテアヌムは、シュタイナーの「メタモルフォーゼ」体験そのものである。そしてそれは、「真の人間性」認識へと通じる。

そのための建築は、芸術的に造形されなければならない。それは、「メタモルフォーゼ」に代表されるような生命ある有机的自然は、抽象概念によって

とらえようとするとは生命を失い、自然の有機性を保ったままで体験できる方法、そしてそれを具体化できる方法が芸術的方法だと、シュタイナーはゲーテ研究から確信したからである。こうして完成された有機的建築ゲーテアヌムは、総合芸術品と呼び変えることができる。総合芸術品ゲーテアヌムは、抽象的概念で分析解釈したり、理性で考える対象ではない。シュタイナーが有機的自然の「メタモルフォーゼ」に身をゆだねたと同じように、ゲーテアヌムの芸術性に身をゆだねなければならない。そうすることによって初めて、「真の人間性」を体感することができる。

ゲーテアヌムは、このようにして人間が自らを知り、再認識する役割を担うものであった。それは、人間自身との自己対話を促すということである。これによって人間は、「メタモルフォーゼ」(変身)を遂げることができるのである。

シュタイナーのいう「有機的建築」とは、「メタモルフォーゼ」を繰り返す現実の有機的自然そのものであろうとする建築のことである。そのために建築に携わる者は、「自然がいかにメタモルフォーゼを生きているかを愛情と思いやりを込めて理解する」こと、ゲーテの表現をかりれば、「対象的思惟」がまず必要である。そして、「芸術的—彫塑的な造形力によって自然の創造に近づく」努力をしなければならない。(「建築様式への道」, 251) これによって初めて、現実の自然の一部と化した有機的建築が実現し、その中で人間は、自然の一部として「メタモルフォーゼ」を遂げることができるのである。

6 ゲーテアヌムから学校建築へ

以上のようにとらえることのできるゲーテアヌムは、ヴァルドルフによってどのように受けとめられ、学校建築としてどのように受け継がれているだろうか。これについては、稿を改めなければならないが、今後の論考の方向を示すために、長年ヴァルドルフ学校建築に携わり、またその中心的役割を果しているJ. ペータースの論文に触れることにしたい。これは1983年の論文で、過去数十年のヴァルドルフ学校建築を総括して書かれたものである。

彼はこの論文の中で、有機的建築としての学校を、4つの観点から考察することができる」と書いている。

第1の観点は、「材料—機能的」観点である。有機的建築は、建築材料の選択において、あるいは建築のプロセスにおいて、環境保護を配慮するものである。ペータースには、科学技術が自然から、すなわち自然に含まれる人間から遊離しているという基本認識がある。彼はいう。

この地球という有機体から生まれる素材と人間との親和性が問われたり、技術や自然の素材と人間生活過程との親密性あるいは乖離が研究されることから、……いわゆる環境に優しい建築という問題は、有機的建築に統合される構成要素である。(organische Architektur, 610)

シュタイナーによれば、就学年齢期に幾つかの変身を遂げる成長途上にある生徒(「学校建築(1)」, 251)に対して、生命ある活きた教育を提供するためには、学校自体が有機的なものでなければならない。そして有機的建築は、生徒が生活する環境との親和性が問われる。有機的建築は、周りの自然と乖離するものであってはならないのである。すなわち学校建築は、環境保護に配慮する建築であり、このことは、有機的建築の構成要素である。

この観点での一つの成果の例としてペータースは、校舎の塗装などの際に使われる顔料の素材の工夫を挙げる。ヴァルドルフで使われる顔料は、合成物質を使ったものではなく、自然の展色剤が使われる。技術工学の発達によって人工素材にあふれる現代において、自然から生まれる素材に対する配慮は、有機的建築には不可欠のテーマである。ただ、現実の学校建築に関する報告を読む限りでは、この観点は努力目標という意味合いが強いようではあるが。上で、ゲーテアヌムは、機械論的合理主義や機能主義などに対抗するものであることを確認したが、このような建築のあり方は、この第1の観点でおさえられているといえるだろう。

第2は、「フォルム」の観点である。ペータースは校舎のフォルムに関して、

「校舎の模範は、人間の形態である」(organische Architektur, 610)と書いている。それは、校舎は人間の形態とフォルム的に類似していなければならない、という意味ではもちろんない。ペータースによれば、人間形態には、二つのエネルギーがあるという。ひとつは、丸いフォルムになるエネルギーであり、もう一方は、真っ直ぐなフォルムになるエネルギーである。彼によればこの二つのエネルギーは、メタモルフォーゼしながら校舎全体を貫くものでなければならない。そしてこのエネルギーの響きが、建築のフォルムとして感じとれるものであることが求められる。

「メタモルフォーゼ」が建築の根本原理であることは、ゲーテアヌムにもヴァルドルフ学校建築にも共通している。そのフォルム化について、ゲーテアヌムに関しては大ホールの柱を通して既に少しだけ触れた。今後、学校建築において、「メタモルフォーゼ」のフォルムが具体的にどのように実現されているかをみていく必要がある。前述したが、ヴァルドルフでは、生徒は幾度かのメタモルフォーゼを遂げる存在としてとらえられているので、各学年段階において建築のフォルムの違いがみられる。

第3は、「心理学的」観点である。この観点は、建築における物理的空間とそれを利用する人間の内面との関係性に関するものである。ペータースは、空間が人間魂と無関係に存在するのではないというシュタイナーの指摘を取り上げ、建築空間を、建築の機能を追求する物理的側面だけでとらえるのではなく、建築空間をいわば心理的体験空間としてとらえる視点が必要であることを述べている。そして、この観点を持って学校建築に携わることは、建築家がとりわけ以下のような点を考慮することであるという。(organische Architektur, 612)

まず第1に、建築家は、建物という外的空間と人間の内面との関係、プラスにもマイナスにも影響を与えうる、シュタイナーのいう魂の関係を、具象的に創造すべきである。第2に、建築家があまり考慮することのない造形手段に、より自覚的であるべきである。というのは、平面図や建物の色彩あるいは建築構造の形態が、そこに住む人間の意志、感覚そして表象に対して影

響を与えるからである。造形手段の中にこそ、建築フォルムの中にダイナミックな空間体験を推進するエネルギーがある。ペータースはこのようにいう。

先に、ゲーテアヌムの特性を説明する際にシュタイナーが挙げた胡桃の例をみたが、ヴァルドルフ学校における「心理学的」観点は、建築が有機体であるための努力、すなわち胡桃の実と殻との関係に近づけるための努力を評価するための観点になっている。当然考慮されるべきであるにもかかわらず、一般にはあまりいかされていないこの観点は、ヴァルドルフ学校建築においては、必ず持たれる観点である。なぜならヴァルドルフでは、次にみるように学校建築の大部分が学校関係者によって遂行されるからである。

第4は、「社会的」観点である。この観点は、ヴァルドルフ学校建築においては、学校内において、また学校の周辺との様々なレベルでの人間の関わりが生まれる、という過去の実際の体験から得られた観点である。ペータースは次のように書いている。

……社会改革運動によって生まれた自由ヴァルドルフ学校にとって、共同で行われる協議、融資、そして建築（父母、教師、生徒、建築家そして建築職人の協力）は、建物の形態が創造されるための生命の血である。
(organische Architektur, 612-613)

私立であるヴァルドルフ学校は、多くの建築資金を学校関係者で賄わなければならない。建築費を節約するために、学校関係者が自ら建築設計、施工に関わるので、建築期間が長期になるのが通例である。しかしこのことは、ヴァルドルフでは何らマイナスの要因にはならない。ヴァルドルフは、学校建築を学校共同体成立の契機としているからである。引用文にあるように、生徒を含めた学校関係者全員が建築職人と協力して行われるのが、ヴァルドルフ学校建築である。このことが、もう一方で建築を生命あるものに、いわば有機的建築たらしめているのである。この点は、ゲーテアヌム建築にもま

さにあてはまることであった。

ヴァルドルフ学校建築は、ゲーテアヌムの建築構想を受け継いでいることが大まかではあるが確認された。学校建築においては、成長途上にある子ども達の「メタモルフォーゼ」に、より焦点を当てた有機的建築であろうとしている。それは、次のような言葉にも表れている。

ヴァルドルフ学校建築が求められるときに問題になるのは、教育活動のために役立つ手段を創造するということである。……重要なことは、そのフォームを通して12年間の学校生活の間生徒達と体験を共にするような、芸術的に創造される実用的建築であるということである。(Wangen, 518)

ヴァルドルフ学校においては、シュタイナーがゲーテアヌムを建築したときと同じように、初めに建築ありきではない。したがって、ヴァルドルフでは、一般にはあまり問題にされないことが問題となり、それをクリアーするために、普通行われないような建築施工の体制や手順がとられる。こうしたことを以上の観点を手がかりにしながら考察することは、稿を改めなければならぬ。

<引用文献>

- 1 拙稿,「自由ヴァルドルフ学校の学校建築(1)——シュタイナーのゲーテ自然科学研究理解——」,『人文研究』第87輯所収,1994年「学校建築(1)」と略す
- 2 R. Steiner, Der Baugedanke des Goetheanum, Dornach/Schweiz, 1986「Baugedanke」と略す
- 3 拙稿,「R. シュタイナーの『教育芸術』論——ヴァルドルフ教育学の基礎的考察——」,『人文研究』第89輯所収,1995年「教育芸術論」と略す
- 4 R. Steiner, Architektur, Plastik und Malerei des Ersten Goetheanum, Dornach/Schweiz, 1982「Architektur」と略す

- 5 R. Steiner, Das Goetheanum in seinen zehn Jahren , Dornach/
Schweiz, 1961 「zehn Jahren」 と略す
- 6 R. シュタイナー著, 浅田豊訳『ゲーテ的世界観の認識論要綱』, 筑摩書房,
1991年 「認識論要綱」 と略す
- 7 R. シュタイナー著, 上松佑二訳『新しい建築様式への道』, 相模書房, 1978
年 「建築様式への道」 と略す
- 8 J. Peters, Möglichkeiten organischer Architektur. In Erziehungskunst
Heft 10, Stuttgart, 1983 「organische Architektur」 と略す
- 9 W. Reindl, Zur Einweihung des Neubaus der Wangener Schule. In
Erziehungskunst Heft 9, Stuttgart, 1983 「Wangen」 と略す